

令和3年10月3日

上野の山文化ゾーンフェスティバル講演会

台東区立 書道博物館 企画展

なかむらふせつ
中村不折コレクション

書でみる日本の歴史と文化

本日は上野の山文化ゾーンフェスティバル講演会ご参加くださり、誠にありがとうございます。この資料は展示の解説文をより簡単にまとめたものです。鑑賞の一助としてご活用ください。

今回のテーマは日本の歴史上のできごとと登場人物の書の後半です。あの戦いや事件、できごとなど、日本史を彩った有名人たちの書をぜひご覧ください。

【 第1展示フロアー 】

【漢字の伝来】

日本人のご先祖さまたちは、狩りや採取で日々を暮らしていました。縄文時代の末ごろには稲作、そして弥生時代には金属器の作り方など、さまざまな知識・技術・情報が大陸から伝えられ、集落や小国家が形成されていきます。こうしたなかで漢字も伝えられました。大陸の人たちが漢字をつかって記録しているところを見た、あるいはお金など、携えてきたもののなかに見えた、というのが日本人と漢字の出会いと考えられています。ここでは、中国新時代(8～23)に流通した貨泉を展示しています。貨泉は日本の古代遺跡からも出土しています。

【仏教の伝来】

むかしむかし、ヒマラヤのふもとに住んでいた釈迦族の地方貴族の子、ゴウタマ・シッダータが悟りを開いて仏陀となります。はじめは仏陀のお骨を納めた塔が信仰の対象でしたが、1世紀末ごろに彫刻の技法が加わって仏陀やさまざまな如来さま・菩薩さまが作られ、お経とともに中国、日本に伝わりました。

【文献が語る古代中国】

歴代の中国でまとめられた歴史書を展示しています。中国の歴史書は、主に皇帝の事跡を述べる「本紀(ほんぎ)」と、その時代に良くも悪くも活躍した人物たちの伝記(列伝／れつでん)で構成されています。ほかにさまざまな学問や、日本を含む周辺の外国についても記録されており、これが古代日本を知る手がかりとなっています。はじめは手書きで写本が作られ、のちに印刷されて後世に伝えられました。展示しているのは中村不折が書道研究のために購入し、手に取って学んだものです。

【大型展示ケース／和と大陸 ―広開土王碑―】

倭の国についてしらべるには、古代中国の書物のほかに、当時建てられた石碑も貴重な情報をあたえてくれます。倭と大陸とのようすを伝えているのがこの「広開土王碑」。東アジア最大級の刻石資料で、高さはおよそ6メートル。まずは大陸のスケールの大きさを体感しましょう。

当時の倭ではまだ国産の金属が見出されていなかったため、鉄などを求めて大陸とつながりを持とうとしましたが、トラブルもあったようです。

★広開土王碑 ざっくり読むとこんな内容です

大王さま、395年の初陣で大活躍。396年には百済(くだら)を攻めて大活躍。399年に倭が百済と手を結んだので、大王さま、倭の進出で危なくなった新羅(しらぎ)の救援を決定します。そして5万の兵を派遣して倭と戦い、倭は退却しました。404年に、倭は朝鮮半島の西海岸沿いに軍船を北上させました。大王さまは、自ら兵を率いて迎撃し、倭を破りました。410年には、大王さまは自ら兵を率いて東夫余(ひがしふよ／中国東北部の国)の都に迫りました。この時、大王さまは恩をほどこし、五つの村を従えて凱旋しました。412年に亡くなりました。

【国家形成 —飛鳥時代—】

紀元前1世紀ころから日本の各地に小さな国々が形成され、3世紀後半には大和政権によって日本の統一が進みます。そして593年には聖徳太子さまが政治に参加し、海のかなたの隋王朝の政治・文化を積極的に採り入れようしました。その過程で石碑(いしぶみ)や墓誌の様式も大陸から伝わり、この時代から作例がみられるようになります。

【奈良時代】

大陸から書物や経典がもたらされても、読めなければ役立てることはできません。遣唐使には、日本人の識字能力を向上させるという目的も含まれていました。当時中国では美しい楷書が書かれていた時代です。奈良時代の書にもその影響は強く表れていますね。

【 第2展示フロア 】

【平安時代 —三筆—】

平安時代前期、書に優れた空海・嵯峨天皇・橘逸勢のお三方を「三筆」といいます。奈良～平安時代の日本は、遣唐使によって唐の政治・文化を採り入れました。そのなかで最新の書法ももたらされることとなります。その中心はやはり弘法大師空海さまでした。

これ以後、時代ごとに「●●の三筆」と呼ばれるようになります。

【平安時代 —かなの発達—】

日本人のご先祖さまたちは、自分たちが話す言葉を記録する文字を持っていなかったもので、漢字をつかった日本語表記を試みます。はじめはいわゆる「あて字」(奈尔波都(なにはづ)など)。これだと筆記に時間がかかるので草書で書かれます(草仮名／そうがな)。さらに簡略化し、正式表記の漢字(真名／まな)に対して仮名(かりな→かな→かな)となります。名とは字のこと。通俗「平」易の字として平仮名が発達しました。このやわらかい書きぶりに調和する日本独自の書法を和様(わよう)といいます。

【平安時代 —和様の書—】

平安時代の中頃に遣唐使が廃止されると、日本独自の国風文化が栄えます。こうしたなか、書では平仮名の発達とともに、これによく調和する和様の書が完成しました。まず小野道風がその道を開き、藤原佐理を経て、藤原行成によって完成されました。この三人の筆跡をそれぞれ野跡(やせき)・佐跡(させき)・権跡(ごんせき／行成の位が権大納言／ごんだいなごん)と称したことから、「三跡」といいます。

【平安時代 貴族たちのみやび —装飾経—】

奈良時代は仏教が重んじられ、数多くの写経が作られました。そのほとんどは白紙に墨書されたものでした。続く平安時代は貴族の時代。美しく染めた紙に下絵がほどこされ、金字や銀字で書写された、貴族の権勢を表すかのような装飾経が数多くつくられるようになります。そして貴族文化の終わりとともに写本の時代も終焉を迎え、印刷の時代へと進みます。

【平安時代 —源氏と平氏—】

平安時代中頃、強い武力を持つ武官は「武者」と呼ばれ、のちに武士となります。彼らは有力貴族のもとで力をつけ、徐々に源氏と平氏が台頭していきました。人徳と武勇に優れ、新興武士勢力の地位向上につとめたのが源義家公。その約1世紀後には、平清盛公がはじめて武家政権を樹立します。そして清盛公没後には源頼朝公が鎌倉に幕府を開きました。

【室町～戦国時代】

室町時代は、前半に京都と吉野(奈良)にそれぞれ天皇を頂く南北朝時代があり、第3代将軍の足利義満公がこれを終結させます。そして第8代義政公の1467年に始まった応仁の乱以降は群雄割拠の戦国時代となります。織田信長公が15代義昭公を京都から追放したことで室町時代は終わり、安土桃山時代を経て江戸時代を迎えます。

【 特別展示室 】

【日本の古代碑】

中国において石は不滅の象徴とされてきました。その硬さゆえに刻むなどの加工は難しいのですが、刻まれた情報は永く伝えることができます。稲作や金属加工、そして漢字などと一緒に石の加工技術や石碑の様式も日本に伝えられたのでしょう。ここでは、奈良～平安時代に造られた古代碑を特集しています。

【 第2展示フロアー → 中村不折記念室 】

【室町時代のくらし】

室町時代では、それまで貴族が食べる高級品であった味噌が一般にひろまり、保存食としても活用されるようになります。当時はいつ戦闘が起こるかわからなかったのも、普段は質素な暮らしぶりだったそうです。

ここでは、当時流通していたお金と、当時の一升分のますをご覧ください。日本ではお金は作られてもあまり流通せず、中国から伝わる貨幣がよく流通していました。

【 中村不折記念室 】

【武士たちの教養 ―儒学と唐様―】

江戸時代初期は和様の流派書道が主流でしたが、中頃からは中国の書を学んだ「唐様」が流行します。幕府が武士階級の教育に儒学を採用したことから自然と中国趣味が流行し、また8代將軍吉宗公の時代に鎖国が緩和され、中国からもたらされた多くの手本が尊ばれました。江戸時代を彩った多くの著名人が唐様の大家として名を連ねています。

【史実のご老公さま】

「おぬしもワルよのう」なんて言いそうなお代官様たちをこらしめる時代劇がかつてありました。その主人公のモデルとなったのが水戸藩第2代藩主の徳川光圀(みつくに)公です。実際は文化財の保存に尽力し、『大日本史』の編纂も主導して「水戸学」の基礎をつくりました。そして「日本三古碑」の一つに数えられる「那須国造碑(なすこくぞうひ)」の保存と調査に派遣されたのが、助さんのモデルとなった佐々宗淳(さっさむねきよ)さんです。

【晴天を突け！？】

今年は、ついに新紙幣の肖像画に採用された「近代日本経済の父」渋沢栄一さんがなにかと話題です。実は日本盛株式会社(株)の創業者をたたえる石碑を中村不折と一緒に作っています。

ここでは、渋沢さんと同じ時代を生き抜いた人物たちの書をご覧くださいませ。幕末～明治の熱量を体感してください。

【文明開化と明治の思想】

明治の時代となり、新政府は欧米列強への仲間入りを目指しました。これを実現するためには、幕末に諸外国と結んでしまった不平等条約の改正と、欧化政策の推進が必要でした。当時、「なんでも西洋化！」という風潮に警鐘を鳴らし、伝統的日本文化の保存を唱えたのが陸羯南(くがかつなん)氏。徳富蘇峰(とくとみそほう)氏は、平民が自由な生活や経済を営み、平等を達成したうえでの西欧化を唱えました。

【明治の美術を支えた男たち】

明治初期の文明開化がもてはやされたのは最初の10年ほど。そのあとは反動的に、日本の伝統的な文化を守る流れに変わります。そのあおりを食らったのが近代日本に根付き始めていた西洋美術でした。展示場所は取り上げられるわ、補助金はなくなるわ、西洋画撲滅運動まで起こされるわで大変でしたが、小山正太郎(こやましょうたろう)・浅井忠(あさいちゅう)両先生のご尽力のおかげで、苦難の時代をのりこえることができたのです。

【 次回展「没後700年 趙孟頫とその時代―復古と伝承―」のごあんない 】

本日はご清聴ありがとうございました。次回は東京国立博物館との19回目の連携企画「没後700年 趙孟頫とその時代 ―復古と伝承―」を、2022年1月4日(土)～2月27日(日)の期間でを開催いたします。こちらもぜひご期待ください。

※この資料の複写及び転載はご遠慮下さい。

台東区立書道博物館